

第7章

自殺予防に関するQ&A

子どもの自殺やその予防についてよく尋ねられる質問とその答えをまとめてみました。マニュアルを通読する時間がないという方は、Q & Aだけでも読んでみてください。

Q1 「死ぬ、死ぬ」と言う人は死なないと言われますが、これは本当でしょうか？

A 自殺に関して誤解がいくつもあります。これはその典型例です。自殺など起きてほしくないという気持ちのために、こういった考えが浮かぶのかもしれませんが。

実際には、自殺してしまった人のほとんどが最後の行動に及ぶ前に必死になって救いを求める叫びを発しています。そこで、それを受けとめることが自殺予防の第一歩となります。相手は誰でもよいというわけではなく、この人ならば真剣に受けとめてくれるはずだという人を意識的・無意識的に選んで「死にたい」「自殺する」と打ち明けています。

「自殺したい」などと打ち明けられると、そのような気持ちを聞かされた人は強い不安に襲われます。そして、不安のあまり、話をそらそうとしたり、激励したり、叱ったりしかねません。しかし、まず徹底的に聴き役に回ってください。絶望的な気持ちを正面から受けとめてくれる人がいることは、自殺予防の第一歩となるのです。

Q2 子どもと自殺について話しあったりしてかまわないのでしょうか？ それをきっかけにして深刻に自殺を考えたり、実際に行動に及んだりしないか心配です。

A 子どもの自殺について取り上げようとする、大人からこのような反応が出てくることはめずらしくありません。しかし、深刻な問題を抱えて自殺を思い浮かべている子どもがいたり、あるいは、マスメディアがしばしば自殺について報道したりするため、子どもは自殺について多くの情報にすでに触れてしまっているというのが現実です。今ではインターネットを通じてこの種の情報を手にしている子どもも少なくありません。直接知っている人、あるいは有名な歌手や俳優の自殺など、大人が考えている以上に子どもは自殺についてすでに多くのことを知っています。

しかし、大人が自殺をタブーのように扱うために、子どもは自殺を防ぐ方法などまったく絶望的な状態だと信じこんでしまいかねません。そして、子どもは大人が自殺に対して抱えている恐れを敏感に感じ取って、大人の前では口を閉じてしまうのです。

率直で、誠実な態度でもって自殺について話すならば、それが自殺の危険を引き起こすことはありません。漠然とした不安をひとりで抱えこんでいるよりは、問題について語り、言葉で表現できるほうがよいのです。そうすることで、事態を冷静にとらえて、他のよりよい問題解決を探る第一歩となります。

Q3 どのような態度で子どもと自殺について話し合うべきでしょうか？

A 自殺に関しては多くの誤解や、不正確な情報が飛びかっています。そのような実態を知らずに、誤った情報を正しいものだと信じている人も少なくありません。そこで、まず自殺とその予防について正確な情報を身につけることが肝心です。

実際に自殺してしまわないまでも、苦しい状況に追い込まれて自殺を深刻に思い浮かべるようになることは、長い人生の中で多くの人に起こる可能性があることを子どもに説明しておきます。そのような状況で絶望的になってしまうのは異常なことではなく、危険を示すサインやそれを乗り越える方法を学ぶことが重要である点を強調します。

自殺の否定的な面ばかり焦点を当てるのではなく、それを克服する方法があり、そうすることで成長を遂げられるという点を強調してください。絶望的な状況に対してひとりだけの力で向きあおうとするのではなく、周囲の人に救いを求めて、そのような危機を乗り越えていった例を、子どもたちに示すのです。

なお、恐怖をあおるような方法は使うべきではありません。子どもは被暗示性が高いので、自殺の場面の写真や方法を詳しく説明することは控えてください。

「自殺が起きた」「原因は〇〇だった」「このような方法で自殺した」などと詳しく解説するのではなく、むしろ、自殺にまで追いつめられるような場面では、どのような感情に襲われて、どのようなサインが出るのか、その際にはかならず大人に救いを求めるといった具体的で有効な問題解決のための手段を教えることに力点を置いてください。

Q4 子どもの自殺はどちらかといえば稀なのだから、大げさに取り上げることはかえって問題ではないでしょうか？

A このようにはっきりと質問する人もいれば、質問をしないまでも、同じような疑問を抱く人も少なくないようです。

子どもの世代では、事故死とともに、自殺が重要な死因になっています。さらに、自殺とは死にゆく人だけの問題にとどまりません。遺族や友人に精神的な打撃を及ぼします。また、自殺で命を失った人の背後には数多くの自殺未遂者がいます。このように、実際に自殺で亡くなってしまう人の数だけを見て、子どもの自殺がそれほど深刻な問題ではないなどと考えないでください。

この世代の心の健康は、一生にわたるメンタルヘルスに密接にかかわる重要な問題です。もしも、この時期に、自殺まで思いつめるような深刻な問題を抱えたのに、適切なケアを受けないまま放置されてしまうと、後の人生でさらに深い心の傷になってしまう可能性が高いのです。そこで、問題を早いうちに認識し、それに適切に対処していく必要があります。

自殺が何の対策も立てられない絶望的な状況だと思いこむようになる前に、子どもの柔軟な心に自殺予防についての適切な情報を伝えておくべきです。子どもはきちんとした対応をされれば、大人が考えている以上の回復力を示すものです。したがって、問題に取り組む前に、大人の先入観で物事を判断してしまわないようにしましょう。

Q5 子どもが落ち込んでいるからといって、何とかそれから立ち直るのが自然であって、あまり大騒ぎをして、精神科医に見せたりするのもかえって問題ではないでしょうか？

A 教師自身が子どもの頃に、問題を抱えて、悩んだものの、幸い、周囲の人々の助けを借りて、それから立ち直った経験をしていることも多いでしょう。その経験から、今、目の前にいる子どももいつか悩みから立ち直るはずだ、立ち直ってほしいと考えても当然です。

また、残念ながら、わが国では今でも心の病や精神科受診に対して強い抵抗があることも現実です。自殺の危険が高まっている人がすべて心の病にかかっていると決めつけている訳ではありません。何らかの疑いを持ったら、専門家の意見や助言を聞いてみてくださいということなのです。

中学生や高校生くらいになると、大人と同じような形で、うつ病や統合失調症といった心の病が発病し、それが自殺の危険と強く結びついていることがあります。そのような場合には精神科治療が欠かせませんし、効果もあります。背景に潜んでいるかもしれない心の病に気づかないで、本人を支えようとしても、根本の解決にならないこともあるのです。このマニュアルで取り上げた心の病の症状や自殺の危険を示すサインに気づいたら、教師は家族に連絡して、一度、専門家の意見を求めるように働きかけてください。精神科受診は、大人よりも、子どものほうが素直に受け入れることをよく経験します。自分の悩みに真剣に耳を傾けてくれる大人に出会って、安心する子どもも多いのです。

Q6 精神科というと敷居が高いです。いざ相談に乗ってもらいたいと思っても、どこで情報を手に入れたらよいか、そして、どこに連絡したらよいかわかりません。

A 内科医、外科医、小児科医などと比べて、精神科医が実際に何をやっているのかまるで想像がつかないという人が多いようです。できれば一生の間、関わりを持ちたくないというのが正直なところかもしれません。

心の問題を扱う人としては、精神科医ばかりでなく、臨床心理士、精神保健福祉士、精神科看護師、カウンセラー、電話相談員などさまざまな分野の人がいます。

まず、学校側から積極的に働きかけて、心の問題の専門家と連絡をとってみてください。どこから始めたらよいかわからないならば、各都道府県と政令指定都市には精神保健福祉センターが設置されているので、そこに連絡して、用件を伝えれば、地域で活動している専門家を紹介してもらえます。危機的状況が実際に起きてしまう前に、学校と専門家が緊密な関係を打ち立てておくことが大切です。

また、実際に何らかの問題で精神科治療を受けている子どもがいる場合は、本人や保護者の同意を得たうえで、学校側も担当医と話し合う機会を設けてください。子どもを治療していく際に、本人、家族、学校、医療機関が協力していく必要があります。学校や家庭での様子はどうか、入院から外来治療に移るにあたって学校や家庭でどのように対応してほしいかなど、精神科医が学校側と話しあいたいことは数多くあります。

Q7 子どもからリストカットを「またやっちゃった」と言われ「やめた方がいいよ」と軽く返事をしています。すぐに自殺には結びつかないと思いますが、どのように接していけばよいのでしょうか。

A 「手首を切って、気分が晴れるならば、したいようにさせておけばいい。そんなことで死なない」などと言う人もいますが、これは暴言です。その場では命を落とすことはない自傷行為であっても、適切なケアを受けられないと、その後、現実には自殺につながる危険がきわめて高いことを忘れないでください。これは放置してよいものではありません。子どもの発している「救いを求める叫び」に耳を傾ける必要があります。

リストカットを繰り返す子どもの絶望感を受けとめつつも、問題に対処するためにリストカット以外の方法を一緒に考えていきます。ただ単にリストカットをしないようにと言っても何の効果もありません。自傷行為に及びそうになったら、一時的にでも他に注意をそらす練習をすることも効果があります。リストカットに及ぶ子どもの多くは自分の価値を不当なまでに低く見ていることが多いので、自尊感情を高めるように働きかけていくことも大切です。問題を抱えたときに、他の適応力の高い対処法を使うように働きかける必要もあります。

なお、子どもの生活環境に根本的な問題がある場合には、その解決を図ることも欠かせません。本人、家族、学校、地域の関係機関が連携して、この問題にあたっていかなければなりません。

Q8 教師にできること、しなければならないこと、そして、できないこととは何でしょうか？

A 自殺を予防するうえで、関係者がそれぞれの能力と限界を見きわめておくというのはとても大切なことです。得てして、真面目な教師ほど、子どもの悩みをすべて自分だけで抱えこんでしまい、他に協力を求めることは敗北だなどと考えがちです。また、子どもから自殺願望を打ち明けられたものの、「誰にも言わないで」と言われたために、それを秘密のままにしておかなければならないと考える教師もいます。しかし、自殺はひとたび起きてしまったら、取り返しがつきません。

子どもの心の支えになろうという姿勢は尊いものです。しかし、いくら熱心な教師であっても24時間子どもと一緒にいることはできません。また、ある年月が過ぎれば、子どもは学校から巣立っていきます。

教師として子どもをどのように支えていくことができるのか、家族と協力して子どもの孤立感にどのように働きかけていくのかよく考えてください。また、自殺の危険の背景に心の病が疑われる場合には、医療機関との連携も重要になってきます。

家庭、学校、そしてさまざまな地域の関係機関をできる限り活用し、お互いに協力しあって、子どもを見守っていくことが重要です。これは子どもの健全な発達全般に必要なことですが、とくに自殺予防に当てはまります。

Q9 最近、学校ではしなければならないことがあまりにも多すぎます。まず、自殺予防ではどこから始めたらよいのでしょうか？

A 優先順位をつけるというのは、どのような状況でも大切です。「今、ここで」できること、すべきことは何かを考えることが、問題解決能力を改善する第一歩です。

自殺予防教育で対象としてほしいのは、子ども、教師（そして、他の学校関係者）、保護者です。具体的には、子どもの自殺の実態、自殺のサイン、ストレスと自殺の関係、自殺の危険への対応の仕方、地域の関係機関などについて教えます。このすべてを実施できれば理想的ですが、実際にはかなりの時間も人も必要ですし、ただちに全面的に実施するとすると、大きな抵抗にあうことも予想されます。

そこで、教師の有志だけでもこのマニュアルを通読してみてください。そして、学校の抱えた問題に対して、実際にどの部分が実行可能か検討してください。これだけでも、突然、危機的な状況が起きたときの対応は大きく改善されます。というのも、実際には何の準備もないまま、事件が突然起きて、大混乱に陥ってしまうのが現実だからです。

また、万が一、学校で子どもの自殺が起きてしまった場合、いくら隠そうとしても、数日以内にほとんどの子どもがその事実を知ってしまいます。そこで、不幸にして自殺が起きてしまったときの対応（ポストベンション）については、最低限ただちに行わなければならない（第5章参照）。これには相当専門的な知識も必要となりますので、地域の専門家の協力を得て、実施する必要があります。

Q10 発達障害の子どもへの理解や対応、非行、いじめ、不登校などの生徒指導と、それだけでなく実に多くの問題を今の学校は抱えています。そのうえ、教師が自殺予防にも取り組む余裕はありません。最近、教師の限界をしばしば感じています。

A 教師といえども、長所もあれば短所もある生身の人間です。子どもに接していくうえで、教師自身のごく普通の人間として生きてきた経験が役立つのではないのでしょうか。これまでの人生で深刻に悩んで、死を思った場面があったかもしれません。それをどのように乗り越えてきたか、子どもたちに率直に話しかけることは、どんなに立派な自殺予防プログラムよりも印象深い話として子どもの心の中に残るはずです。

さまざまな限界がある中で今でも先生方が精一杯責任ある行動を取っています。そして、子どもたちは毎日それを目にしているのです。成長した暁に問題を抱えたような場面で、学校で先生から指摘された一言がふとよみがえってきたという経験をしたことがある人は少なくないと思います。一般的な人生の教訓を語ることに教師の皆さんは抵抗を感じないでしょう。それならば、ぜひ、何かの機会に、人生において避けて通ることのできない「生と死」の問題も取り上げてほしいものです。また、子どもの心の健康について話す機会を持つということは、指導する役割の教師自身のメンタルヘルスにも当然、関わってきます。子どもの心の危機について考えることが、自分自身の精神的な健康をどう保つかという問題を考えることにもつながるはずです。

Q11 子どもに深刻な問題が起きていると気づいて、保護者と話し合おうとしたのですが、「家庭の問題に口を挟まないでほしい」と言われて、困っています。学校での子どもの様子は全然変わっていないのですが、どのように対応したらよいのでしょうか？

A 子どもの自殺の危険が家族全体の問題を象徴的に表わしていることがあります。そして、保護者自身も深刻な問題に悩んでいて、子どもの救いを求める叫びを受けとめるだけの余裕がなくなっている場合もめずらしくありません。このような状況で、子どもの抱えている問題を教師が誰よりも先に気づくことはしばしばあります。教師が助けるのは、目の前にいる子どもばかりでなく、その家族も含まれることさえあるのです。

このような事情を十分に理解して、学校は、子どもばかりでなく、家族の問題もともに解決するように、粘り強く働きかけてください。一、二回、家族から拒否されたと感じても、簡単に諦めてはいけません。

最初は家族が拒否したとしても、粘り強く働きかけていった結果、閉ざされていた心が徐々に開いていき、自分たちの力だけではどうしようもなかった問題について保護者が教師に相談を持ちかけてくることがあります。このように教師が家族全体の問題を解決するための第一歩を踏み出した例は数多くあります。危機的な状況に陥る前に、何か家族が問題を抱えたような場合には、学校はいつでも相談に乗る用意があることを、保護者が理解できるような関係をあらかじめ築いておくことができれば理想的です。

Q12 昔もいじめがあったのに、自殺など聞いたことがありません。昔に比べると、とても陰湿ないじめが子どもたちの間にあるのは事実だと思いますが、いじめだけが自殺の原因なのか考えてしまうことがあります。

A 昔は自殺がなかったかという、そうではありません。マスメディアが大々的に報道するため、子どもの自殺が最近急増しているかのような印象を受けますが、子どもの自殺は昔もそして今も深刻な問題です。ただし、自殺は多くの要因からなる複雑な現象であって、原因と結果を単純にひとくくりにはできません。もちろん、いじめが些細な問題だなどと言うつもりはなく、わが国の社会の病理を表わしている深刻な問題です。

しかし、画一的なとらえ方をすると、現実を理解することから遠ざかってしまう危険があります。最近では、子どもの自殺というと、すぐに「いじめ自殺」といったとらえられ方がされます。20年ほど前は青少年の自殺というと、きまって「受験苦による自殺」といった型通りの説明がされていたこととよく似ています。

自殺の原因は複雑です。自殺に至るまでには長い道のりがあり、ひとつだけではなく、いくつもの原因が積み重なっているのが一般的です。そして、葛藤が大きければ大きいほど、表面的にはごく些細に見える出来事がきっかけで自殺が起きることもあります。学校で子どもが受けていたいじめをはじめとするストレスばかりでなく、問題を抱えたときに解決を妨げるような独特の性格傾向、うつ病をはじめとする心の病、家庭の問題などを総合的に見ていかなければ、個々の自殺の実態を理解することにつながりません。

Q13 マスコミによる報道が自殺を引き起こすというのは本当でしょうか？ それほど簡単に人は死を選ぶものなのでしょうか？

A ある人の自殺が、他の複数の自殺を引き起こす現象は群発自殺と呼ばれています。とくに子どもは被暗示性や被影響性が高く、群発自殺に巻きこまれやすいことが指摘されています。誰もが群発自殺に巻きこまれる危険があるわけではなく、潜在的に自殺に傾きやすい一群の人が、センセーショナルな自殺報道に接したときに、それまでは自己破壊の衝動から必死で我が身を守っていたのに、突然、自殺行動に出ることがあるのです。

もともと多くの深刻な問題を抱えていたような子どもが、自殺のニュースに繰り返し接すると、「死ぬことなんて簡単だ」「私が死んでも、みんながあんなに悲しんでくれるのかな」などと考えることがあります。

要するに、報道だけで自殺が引き起こされるというよりは、もともと自殺の危険が高かったものの、何とか生の側にとどまっていた子どもが、過剰な報道に接することによって、最後の一线を越えてしまう可能性が高まると考えてください。

同じ学校の子どもが自殺したような場合には、他の子どもたちに対する影響を考えて、このマニュアルで取り上げたような対策を取る必要があります。それ以外にも、他の地域であっても子どもの自殺についての報道が繰り返されたり、子どもに影響力の強い有名な歌手や俳優の自殺（時には、病死、事故死）が起きたりした場合にも、群発自殺の危険が高まっている状況と考えなければなりません。

Q14 受け持ちの子どもが自殺するかもしれないと感じて、予防のために私なりに一生懸命に努力してきました。しかし、努力すればするほど、「そこまでひとりの子どものためにする必要はあるのか？」「振り回されているだけではないか？」と同僚の中で浮いてしまう自分を感じる場合があります。どうしたらよいのでしょうか？

A 「子どもに自殺の危険が高まることなどあってほしくはない」という気持ちから、大人はしばしばその危険を軽視しがちです。子どもに自殺の危険が迫っていて、なんとかそれを予防しようと努力している教師の態度を見て、同僚が冷ややかな目で見られることもあります。時には、他の子どもたちの保護者からさえ「あの先生はひとりの子どもだけにかかりきりになっている」といった非難の声が上がるかもしれません。

しかし、ここでもっとも大切なのは、他の人々の反応をどうとらえるかではなく、「どのようにして子どもを守るか」ということなのです。自殺は起きてしまったら、とりかえしがつきません。しかし、自殺が起きるかどうかを100%正確に予測することはできません。たとえ、結果として自殺が起きなかったとしても、子どもが必死になって「救いを求める叫び」を発していることは紛れもない事実です。質問者が感じている危険性を粘り強く、同僚や保護者に伝えるように努力し続けてください。

これまでも何度も強調してきたように、自殺予防は単独の努力だけではうまくいくものではありません。学校、家族、地域、関係機関が互いに協力していく必要があります、子どもの危険に最初に気づいた教師がその要になるべきなのです。

Q15 自殺が起きてしまいました。できる限りの努力をしていたつもりでしたが、決定的なサインを見逃したのは私の責任ではないかと自分を責めてしまいます。

A 子どもが自殺未遂に及んだり、深刻な自殺願望を教師に打ち明けていたのに、適切な対処をしていなかったり、陰惨ないじめに気づいていたのに放置していたといった場合には、自殺が起きたことに対する徹底的な原因の究明が必要です。

しかし、何のサインにも気づかずに、青天の霹靂のように自殺が起きることもあります。あるいは、薄々、子どもの最近の行動の変化に気づいていたり、明らかに心の病があって、家族や精神科医療機関と連携をしながら、子どもを一生懸命に見守っていたのに、自殺が起きてしまうこともあります。

どれほど予防に努力していたとしても、将来を100%正確に予測し、それに対応できないことも現実にはあるのです。最大限の努力をしても防ぐことのできない自殺もあります。不幸にして起きてしまった自殺に対する哀しみを、ご遺族や他の子どもたちと分かちあってください。深い悲しみのどん底にあるのはご遺族ですが、それまで一緒に学んできた他の子どもたちや、担任教師も深刻な心の傷を負っています。

子どもの自殺が起きてしまった後に、教師自身がうつ病になってしまい、その後、教壇に立てなくなってしまった例すらあります。自殺が起きたことについて強く自分を責める、眠れない、食事が取れない、何もする気が起きないといった症状に気づいたら、早い段階で精神保健の専門家に相談してください。

まとめ

子どもの自殺やその予防についてよく尋ねられる質問を挙げて、答えをまとめてみました。重要な点は、このマニュアルを叩き台として、各学校の実状にあった自殺予防の対策を検討しておくことなのです。マニュアルの中で解説したすべてを実施できないにしても、「今、ここで」何ができるか、何をすべきかを同僚と話しあってみてください。

理想的には、そもそも自殺が起きないことを目標にした予防プログラムを実施すべきです。しかし、さまざまな理由から、ただちにそれを実施することが難しいならば、不幸にして自殺未遂や既遂が起きてしまった後に、適切な対策をすることだけでも始めてください。

子どもの自殺には何も手を打てない不幸な出来事であるとか、時が経つことだけが心の傷を癒してくれるといった消極的な態度は捨てて、実際に何ができるのかを真剣に考える時期が来ているのです。

こんな疑問を感じたら

さらに次のような疑問について、その答えとなる該当部分を示しておきます。

1. 今、なぜ自殺予防について学ぶ必要があるのですか？ ……「はじめに」
2. 自殺予防に関して、最初に何を学ぶ必要がありますか？ ……目次欄外
「このマニュアルについて」
3. 日本は自殺が多いと言われますが、実際にどの程度なのですか？ …… p.1
4. 子どもの自殺の実態はどのようなものですか？ …… p.2
5. 何歳くらいから自殺という意識を伴った行動が起きるのですか？ …… p.3
6. 自殺と自傷行為には関連がありますか？ …… p.3
7. 自傷行為とは具体的にどのようなものを指しますか？ …… p.3
8. 子どもが自傷行為を「生きている証」だと主張する場合、
教師としてどう対応すべきですか？ …… p.4
9. 自殺の原因にはどのようなことが考えられますか？ …… p.5
10. 暴力や虐待、拒食や過食、不安や孤独も自殺の原因となることがありますか？ …… p.5
11. 自殺に関連する心の病がありますか？ …… p.6
12. 自殺に傾きやすい性格がありますか？ …… p.7
13. 自殺を凶る前によくみられる症状や行動あるいはサインなどはありますか？ …… p.8
14. 自殺を予防するために、教師として具体的にどのようなことに
注意をすればよいですか？ …… p.10
15. 子どもから「生きていくのがつらい」と相談を受けた時には
どのように対応したらよいですか？ …… p.10
16. 肉親に自殺をした人がいて、自分も自殺を選択するかもしれない
という恐怖を抱いている子どもへの対応はどのようにすべきですか？ …… p.10
17. 「誰にも言わないでほしい」という前提で、自殺願望や自殺未遂について
相談された場合にどのように対応したらよいですか？ …… p.11

18. 学校での「いじめ」が自殺の原因と言われることがありますが、
どのように理解すべきですか？ …………… p.12
19. 子どもが友人から自殺について相談を受けたと言ってきた場合、
どのように対応したらよいですか？ …………… p.12
20. 保護者や友人から「一緒に死んでほしい」と誘われた子どもに
どのような対応したらよいですか？ …………… p.12
21. インターネット・携帯電話・ブログ・携帯プロフなどが
自殺にどのような影響を与えますか？ …………… p.13, p.30
22. 学校では自殺予防にどのような方法で取り組むべきですか？ …………… p.14
23. 子どもの自殺を予防するために、学校内では誰に最初に相談すればよいですか？ … p.15
24. 学校内で自殺予防に関する教職員の役割をどのように考えればよいですか？ …… p.15
25. 保護者から子どもが自殺をしそうな不安があると、
相談された場合の対応はどのようにすればよいですか？ …………… p.21
26. 自殺予防のために適切な援助を行ってくれる専門機関等は、
どのように探せばよいですか？ …………… p.22
27. 保護者との関係がよくない子どもが、自殺願望が強くなったときには
どのような対応をすればよいですか？ …………… p.22
28. 現実に子どもの自殺が起きてしまった場合、最初にすべきことは何ですか？ …… p.26
29. 子どもが自殺してしまった場合、他の子どもたちにはどのように
対応すればよいですか？ …………… p.27
30. 保護者から自殺を公にしないでほしいと依頼された場合の対応は
どのようにすればよいですか？ …………… p.27
31. 教師自身が子どもの自殺によって、精神的な打撃を
受けた場合どのように対応すればよいですか？ …………… p.28
32. 子どもが友人の自殺によって、精神的な打撃を受けた場合
どのように対応すればよいですか？ …………… p.29